

学位申請審査論文の要旨

1980年代後半からソーシャルワークにおいて発展してきたストレングスは、問題や欠損に焦点化してきた歴史をもつ精神障害者支援の転換に大きく貢献してきたが、その概念理解や方法構築は、あらゆる対象や領域での実践にむけた広い視野でなされてきた経緯がある。しかしこのことは、実践現場において、支援者のもつ勘や経験、技量に依存した多様な解釈や理解を招き、概念の混乱や支援方法の未確立という現状も生み出してきた。とくに、精神保健福祉領域では、精神障害者本人がストレングスの発見や情報共有の場面に携わることなく、支援者のストレングス理解を中心に支援が進められてしまうことも少なくなかった。その結果、ストレングス概念は、有効な精神障害当事者主体の支援方法として機能してこなかった経緯がある。

そこで本研究では、「はじめに」でも指摘しているように、精神障害者の地域生活定着の課題を払拭する新たな支援方法として、ストレングス概念に着目する必要性を明らかにし、それを実践に結びつける方法展開や支援ツールの構築を試みることを目的としている。具体的には、精神保健福祉領域のなかに、精神障害者本人のストレングス理解や活用を志向する新たなソーシャルワーク支援方法を定着させるために、第1章～第3章での理論研究をふまえた、第4章～第6章での当事者・支援者との協働作業から、「協働ストレングス・アセスメント」という新たな実践方法や支援ツールを提案しようとした論文となっている。

まず、第1章では、本研究の前提として、日本における精神障害者支援の現状を整理している。とくに、ここでは、精神障害者の地域生活継続の難しさに着目し、精神障害者自身の強みや地域社会にある力を広く認識・活用する視点の欠如した支援に問題があることを指摘している。さらに、この問題の根底には、支援にかかわる強みや力を支援者が共通に理解するための視点や概念の混在があることを指摘している。そのため、本研究では、ソーシャルワーク分野において強み概念として知られるコンピテンス、ストレングス、レジリエンスの比較を試み、利用者の強みを包括的にとらえるストレングスが、精神障害者の広い生活状況をとらえる地域生活定着支援に最適な概念であると指摘した。

次に第2章では、このストレングス概念を実践に結びつけていく糸口として、まず支援全体の方向性や結果に影響を与える「ストレングス・アセスメント」への着目が有効であると主張する。その一方で、そこには、精神障害者自身がストレングスの情報認識や活用場面に参加する具体的な手続きやプロセスの未

確立という問題があることを指摘している。それゆえ、ここでは、ソーシャルワークにおける「協働」や「アセスメント」概念の特徴を先行研究から抽出・整理することから始めている。具体的には、それらの特徴や展開プロセスを先行研究から抽出・整理し、精神障害者本人の参加する新たな「協働ストレングス・アセスメント」の概念や展開方法を明確化している。このような研究枠組みの整理をふまえ、第3章では、精神障害者と支援者との継続的な情報共有や対話を促進する支援技術として、すでにソーシャルワーク領域で活用されているアセスメント・ツールに着目し、その具体的内容について考察している。しかしそれは、利用者から得た情報を支援者の発想で解釈し記録すること目的とした従来のツールでなく、精神障害者本人が意識化や情報認識するために活用できる新たなアセスメント・ツールの提案である。そして、その開発には、当事者本人がアセスメント・ツールの活用に加え、構想・開発段階から参加する意味での「当事者参加」が不可欠であると条件づけている。

そして第4章では、まず精神障害者と一緒に協働アセスメント・ツールのプロトタイプ版を作成していくための視野と方法を考察している。具体的には、当事者との対話や意見交換をとおして知識の構造化を行っていく視点や手続きを体系化した「質的研究法」に依拠し、プロトタイプ版協働アセスメント・ツールを開発していくプロセスと本研究の位置づけをフローチャートで示している。その作成プロセスに従い、ここではまず、先行研究からストレングス・アセスメントの内容を抽出し、項目立てて整理している。さらに、この項目をもとに11名の支援者にインタビューを行い、支援者修正版のアセスメント項目を作成している。この支援者修正版の項目をもとに、第5章では、申請者が11名の当事者と対話や議論を行いながら、プロトタイプ版協働アセスメント・ツールの項目づくりを試みている。その結果、従来のアセスメント・ツールで扱われることの少なかった当事者の価値観や、課題や困難を乗り越えてきた当事者の知など、彼らの生活世界に潜在化するストレングス・アセスメントの情報を明らかにし、それらを153の質問項目として再整理している。また、このような当事者の研究参加をとおして作成されたアセスメント項目は、当事者の理解・イメージできる言語や表現を反映したものとなっている。

最後に、本論文で取り組んできた精神障害者との協働ストレングス・アセスメント方法、また地域生活定着支援に固有な協働アセスメント・ツールの項目作成をとおして得られた成果を論じるとともに、今後の研究課題を明らかにしたのが第6章である。具体的には、当事者参加による研究から、精神障害者固有の価値観や経験を反映し、かつ彼らの理解できる言語や表現を用いたプロトタイプ版協働アセスメント・ツールの項目を作成したことに、本論文の最大の成果があると主張している。しかし一方で、本研究の課題として、アセスメン

ト項目の精査やツール形式の検討、活用方法の提案が残された。これについては、さらなる理論研究と実践研究の循環による実践理論の深化に解決の糸口があると指摘している。

そして「おわりに」では、総括として本論文の自己評価を行い、今後、研究を継続していく課題として、①試行的な実践研究による協働アセスメント・ツールの精緻化、②ツールを活用した協働ストレングス・アセスメント方法の定式化、③理論研究と実践研究の循環による地域生活定着支援方法の構築、を示して締めくくっている。